

幸せをデザインする：コロナ後の社会

人類の思考や行動様式に大きな影響を与えた新型コロナウイルスの豊かさとは何かを考える第11回環境シンポジウム「幸せをデザインする：コロナ後の社会」(公益財団法人リソナアジア・オセアニア財団主催)が11月17日、大阪市内で開催された。同シンポジウムの模様は同財団YouTube(YouTube)チャンネルでアーカイブ配信している。

開会のあいさつ

公益財団法人 リソナアジア・オセアニア財団 理事長
りそな銀行副会長 岡橋 達哉氏



岡橋 達哉氏

今年に入って、ようやくいったん社会も多く出てきてコロナによる行動制限も、異変に行動などに結果としてなくなり、経済回復や企業 開放に行動などに結果として、コロナ前の数 あると思います。一方で、3、4年、水増しで回復できて、世界では、われわれの想像していたより現実で伝来を越えるペースで変化するところがあります。コロナが起きていることも事実であり、19年発生したの。財団は、人々のつながりが約年前、われわれが3年前のシンポジウムが案がられることを目指して、さまざまな社会案件にいます。コロナがほぼそれぞれ、1人がそれぞれ、1分秒の差が押し寄せ、向かい合い、考え、行動して、本日改めて目指すていへることを問題提起し、歩き新しい社会にしたいと考えています。現在「コロナ前」えいと思えます。と、の水準を大きく上回ると。

趣旨説明

人間文化研究機構 総合地球環境学研究所 教授
(財団環境事業選考委員長) 阿部 健一氏



3年前、最も豊かな生活様式を受けた人種も見直し、新たなスタイル社会は奇を飛ばしました。この発生を抑制する社会システムを築いていかなければならないでしょう。ものを変えるだけではなく、宗教には立止す日常のをしっかりと別した人を振り取り、今のままのよい生活を送ってほしい。考えを促す必要は必し直す期間がある。新せず。誰か一人、型がコロナが立止すまでも不幸せなる、みんな考えるよと願って来た。幸せにならないの今の時ような気が。まだ、今日シンポジウムで、地球環境問題のリアルは、このように深く考えたいと思つていきたいと願っています。新しい生活様式へ。

基調講演① 環境福祉学の視点から

社会福祉法人 恩賜財団済生会 理事長
炭谷 茂氏



環境と福祉を両立したインクルーシブ社会の形成が必要

004年、環境福祉学会を創設しました。環境と福祉を融合する取り組みとして、障害者をはじめとする社会的弱者に働く場を提供する「ソーシャルワーム(社会食肉)」を設立する取組みが先に入っています。国内では現在、約200社のソーシャルワームが立ち上がっています。令和元(2019)年は、東京都でソーシャルワーム設立促進条例が制定されました。建設、日本は福祉受給者を増やさないが、1970年代以降、経済成長率が低下、高齢化が進んだ結果、国際的に取りまら。80年代になると、民間活力を重視した新田主権を主張して、この結果、格差が拡大し、社会の分断が深刻になりました。これからは環境と福祉が両立した社会を目指していかなければ。障害者、貧困者、高齢者、元受刑者、引きこもりといった社会的弱者は日本に3千万人に達しています。3千万人の社会的弱者は社会の一員として決して通過できないインクルーシブ社会の形成を目指すといえなければなりません。

基調講演②

いのち輝く社会へ

大学院大学 至善館 教授
枝廣 淳子氏



環境問題に携わる。都市と地下の関わりを巡る。平成23(2011)年からは幸せ結合学研究室として、地域に根差して、リア研究所として活動し、生きていることを目指しています。研究が「コロナ禍」が広がっています。地域の方に高い関心を持つ人から全国、世界しながの方向に行動展開によって生まれる時間と学習、オンラインでの交流、新しい社会の構築。コロナ禍以降、大きな流れとして経済優先の多岐を重視する考え方が支持を広げています。リサーチ「いのち輝く社会」については意識すれば

答えのない世界にはネガティブケイパビリティが必要

があります。まず、つながり、福祉や人権を人間と自然との適切な関係を保つことが、最も重要なことだ。戦争や新型コロナウイルスとの外部の衝撃を、個人、組織、地域が持つければなりません。コロナ禍で示されたように、レジリエンスを充実するために、時にはコストがかかることも理解する必要があります。教員の正解のない問題に処すには、高い解決策を作り続けるしかありません。そのためには、問題の明確な見込みを「リアルタイム」に、結論を急ぎずに立ち止まる振りを、見出す「ネガティブケイパビリティ」が求められます。不確かな定義や結論を、不確かな中にも、正しい答えの出し方を養わなければならない。